

「満載した二陸・山田の魅力を体験してもらおう！」

震災で変わった人生

2011年3月11日、東日本大震災。沢山の人の人生や生き方が180度変わった日。私もその日に人生が180度変わった人間だ。

震災当時、会社員だった私は3月11日からというもの、死に物狂いで働いていた。何故なら、瓦礫撤去には欠かせない建設機械のレンタル会社で働いていたから。必死に働いていたらあつという間に時は過ぎ、気がつけばあの日から3年の時が過ぎようとしていた。

そんな中、携帯電話に母から連絡が入り、父が入院したという連絡だった。私はとても驚き同時に不安になった。父はうどん屋を経営していたが震災後、祖父の菓子製造業を引き継ぎ、うどん屋も再開し、新規に製パン店の経営も始めた。必死に頑張ったのだろうか、

体が悲鳴をあげていたようだ。私は心配になり当時勤務していた会社を辞めて家業を継ぐと決めた。しかし、父に報告したら、「まだ継がなくても良い、好きな事をやれ」と言う言葉が返ってきた。後で聞いたら、その言葉の裏には、「まだ社会勉強が足りない、もっと勉強しなさい」と言う思いがあったようだ。

シーカヤックで起業

ちょうどその頃、県の補助事業で新規起業者を支援する事業があり、そこに応募し採用され、2014年にシーカヤックのガイド、地域の食材を使った食体験を事業とする現在のGEOTRAIL（ジオトレイル）を設立した。

なぜこの事業を興そうと思ったかと言うと、元々実家でカヤックを所有しており、私の小

学、中学時代には仲間と一緒に町内に浮かぶオランダ島にカヤックで渡ると言う最高の遊びをしていた。そんな経験が大人になっても忘れられず、この町に遊びを提供する仕事があってもいいのではないかと思ひ起業に至った。

この町には観光で生計を立てている人は無く、観光名所すらない。この町での観光業のモデルとなる事業も無く、手探りで事業をスタートした。設立した年、お客様はほとんど来なかった。転機が訪れたのは2年目、テレビや新聞マスコミに取り上げてもらってから一気に予約が殺到した。正直こんなにダイレクトに反応があることに驚いた。この年は体験者が150人を超え、大きな自信につながった。それでもカヤックだけで生計を立てるには正直難しい数字であることは事実だ。実際にかヤックで生計を立てる人は年間1000人のお客様を回さないとやっていけないと言



やまだ地産地消ラボ
GEOTRAIL
(山田町)
代表

川村 将崇

う。現実の厳しさを実感するが、この土地で通年カヤックを行うとなるとなかなか大変だ。夏の期間は短く冬の期間が長い。東北でカヤックの事業が盛んではない理由もそこにある。

「やまだ地産地消ラボ」の立ち上げ

しかし、継続していかなければ成功もない。カヤックだけに囚われず、その土地でしか味わえない、あるいは体験できないと言う付加価値で来訪者を呼び込む体験アクティビティのコンテンツを沢山増やしていきたい。

自分は幸いなことに、家業を手伝いながら2足のわらじを履いている。そこで外部の賛同者の協力もいただきながら、ジオトレイルの事務所のほか、家業のうどん屋、ケーキ店、喫茶、山田せんべい菓子工場、そして漁師の産直などをひとつに集めた施設を作り、「やまだ地産地消ラボ」を立ち上げた。「ラボ」の名の下、地域の食や体験の「研究所」を目指し運営している。食体験の体験プログラムでは、家業を生かしたわかめラーメン作りや、地元食材のカキ、椎茸を使った中華まん作り体験を提供している。

個々に事業を行うよりも事業者同士が互いに購買率を高め合うことができ、集合体とな

って商品やサービスを提供することで人が集まりやすく、山田に来ていただく為の目的づくりが狙いだ。山田には目的となる一級観光名所も無ければ施設もない。山田に来てもらう目的が何か明確になれば、町としての価値も見出され、結果交流人口が増えると考ええる。

これからも継続した挑戦を

三陸沿岸では震災後は特に、観光や魅力の目指す所が同じ様に感じていたが、地域ごとの特色を生かしたアイデアなど、工夫を凝ら



山田湾に浮かぶオランダ島を背に、シーカヤック体験教室のみなさん

した新しい取り組みが生まれてきており、この勢いをどこまで保持し貫くかが今後の課題になってくると考える。

常に新しい事をし続ける事が大切だと父はいつも言う。父はその事をいつも私に身をもって教えてくれた。継続して利益を出し、また新しい事業をする、その繰り返しだ。当然失敗もあるだろうし、挫折もあるだろう。だが、困難だろうと継続しなければ事業は成り立たないと思う。地域柄、新しい事をする、良く思わない人、批判する人、いろんな人がいる。だが、人と違う事をしなければならぬ。商売とはそういうものだと思おう。

交流人口増加を目標に、町も総力をあげている。今年から「やまだワンダフル体験ビューロー」という体験観光の総合窓口が発足し、運用を始めている。山田の体験観光のマネジメントや窓口業務を主な事業としている。今まで個別の事業者がお客様を受け入れ観光事業を行って来たが、それぞれの1コンテンツで終わってしまう。そこを2つ、3つとコンテンツを増やしお客様に提案していき、滞在時間を延ばしてもらうことでより多くの体験観光を行ってもらう目的だ。

この団体の発足を機に、町内の事業者間で連携が取れ、狭い町ならではの密なサービスを提供して行ければいいと思っている。